



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



持続可能な未来を創るために

— 人の暮らし方を考える

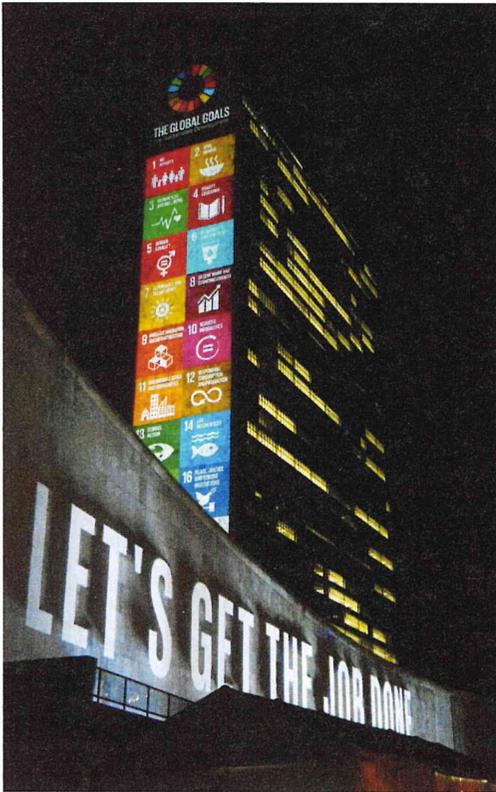
SDGs
(Sustainable Development Goals : 持続可能な開発目標)

2030年までの達成を目指す17の目標

- 目標1 貧困をなくそう
- 目標2 飢餓をゼロに
- 目標3 すべての人に健康と福祉を
- 目標4 質の高い教育をみんなに
- 目標5 ジェンダー平等を実現しよう
- 目標6 安全な水とトイレを世界中に
- 目標7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 目標8 働きがいも経済成長も
- 目標9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 目標10 人や国の不平等をなくそう
- 目標11 住み続けられるまちづくりを
- 目標12 つくる責任 つかう責任
- 目標13 気候変動に具体的な対策を
- 目標14 海の豊かさを守ろう
- 目標15 陸の豊かさを守ろう
- 目標16 平和と公正をすべての人に
- 目標17 パートナリシップで目標を達成しよう

目標
● 持続可能な社会の実現に向けて、自分の課題を発見する。





持続可能な開発目標（SDGs）が照射された
ニューヨークの国連本部ビル

「持続可能な未来」という言葉から、あなたはどのようなイメージをもちますか。

SDGsは、二〇一五年に国際連合で採択された、日本を含めた全ての国の共通目標です。「誰一人として取り残さない」をキーワードに、全ての人々が、それぞれの立場から目標達成のために行動することが求められています。

17の目標は、人間（目標1～6）・豊かさ（目標7～11）・地球（目標12～15）・平和（目標16）、パートナーシップ（目標17）の五つの要素のいずれか一つ以上に相互に関連しています。

中学校での学びを通じて「よりよい未来を創るために、どのように社会・世界と関わっていけばよいのか」について、一緒に考えていきましょう。



プロローグ ――「学びの旅」へ

私たちは、学校はいうまでもなく、日常生活においても多くのことを学んでいます。小学校と同様に、中学校においても新たな知識や技能を身につけ、日々、成長していくことでしょう。ところで、人間はなぜ学ぶのでしょうか。学びとはいったい、どのような営みなのでしょう。「学び」や「学習」についての定義や理論は数えきれないほどありますが、その一つとして、ユネスコ（国連教育科学文化機関）による学習論があげられます。

ユネスコが設置した「二十一世紀教育国際委員会」は学習を四つの類型に分けて示しました。つまり、学習とは「知ることを学ぶ」(learning to know)、「なすことを学ぶ」(learning to do)、「ともに生きることを学ぶ」(learning to live together)、「人間として生きること学ぶ」(learning to be)の「四本柱」から成り立っているという「学習の四本柱」です。同委員会は、人が生きていくうえでそれぞれが、同等に重要であることを説いています。

ごく一例をあげてみます。「知ることを学ぶ」は、かつ

て地上には恐竜きょうりゅうがいたことや、三角形の内角の和は一八〇度であるという事実や法則を知ること、「なすことを学ぶ」は、鉄棒で逆上がりができるようになることや、英語が操れるようになること、「ともに生きること学ぶ」は、ボランティア活動に取り組んだり、仲間と協力して一つの作品を作ったり、戦禍せんかを逃れてきた難民・避難民ひなんみんの人々を手助けしたりすることなどを指します。

では、「学習の四本柱」の最後の柱である「人間として生きること学ぶ」はどのような学びなのでしょう。これは、理解するのにやや難しいかもしれませんが。この一文の解釈は一筋縄ではいかず、これまでさまざまな意識があらわれてきました。例えば、「人間として生きるための学び」や「人間存在を深めるための学び」などです。

いうまでもなく、私たちは生まれながらにして人間です。であるにもかかわらず、どうして「人間として生きるための学び」が必要なのでしょう。また、なぜ人間の存在を深めなくてはならないのでしょうか。

そもそも何かを知ったり、何かができるようになったりする以外の学びは必要なのでしょうか。学びなくして私た

ちは人間として生きられないのでしょうか。「人間として生きるための学び」とはどのような学びなのでしょうか——
 このような「深い問い」が次々と浮かび上がってきます。

この先、中学校での学習をとおして未知の世界と出会ふことでしょうか。その中には地球規模の課題も含まれます。

ここで紹介するSDGsは、二十一世紀を生きる皆さんが共有すべき、持続可能な社会への道しるべであるといえます。

キーワードは「持続可能な社会（未来）」です。これからの三年間、二つの他者、つまり同じ現代に生きていながらも自分とは異なる文化や世界観をもつ他者、そして皆さんの子どもや孫の世代に生きるであろう他者に思いをはせつつ、持続可能な社会について考えていきます。その学びの過程において「知ること」「なすこと」はもちろんのこと、「ともに生きること」も学びます。そして「人間として生きる」「人間存在を深める」とは何か、という問いとともに歩んでいきます。

それでは、「答えのない問い」とともに探究という名にふさわしい〈学びの旅〉に出発しましょう。

15

10

5

参考図書『学習…秘められた宝』
 ユネスコ「21世紀教育国際委員会」編

(天城 勲 訳)

「学習の四本柱」が唱えられている、この本の副題は、フランスの詩人ラ・フォンテーヌの寓話「農夫とその子どもたち」に由来します。

農地の中に宝物が隠されているという遺言とともにこの世を去った農夫の言葉を信じて、子どもたちは農地を深く掘り起こし続けますが、宝物は見つかりません。そのかわり、よく耕された農地から、豊かな収穫が得られる結果となりました。農夫は死に際し、労働することこそが宝であることを子どもたちに教えようとした、という寓話です。

ここでの「労働」を「学習」におきかえ、また自分の中にある潜在的な能力を「秘められた宝」にたとえ、それを掘り起こす学習というプロセスこそが大事であるとのメッセージが表題にこめられているといわれています。

始めの「問い」

「地球規模の課題」とはなんででしょうか。
 思いつく課題を三つあげてみましょう。



「エシカル」に生きよう

すえよし
末吉
りか
里花

皆さんが着ている洋服は、どこで、誰によって、どのように作られたのでしょうか。今朝飲んだ紅茶は、おやつに食べるチョコレートは、その生産工程を想像してみたことはありませんか。

想像したことがある皆さんは、製品を手にとってみても、その裏側にある背景を知るのは難しい、と感じたのではないのでしょうか。買い手である私たちと、製品が作られる背景の間には大きな壁が立ちはだかり、この壁を乗り越えて生産工程を見ることは容易ではありません。

では、その壁の向こう側で、人や地球環境を犠牲にするような問題が起きていたら、どう思いますか。もしかした

ら、その背後には劣悪な環境で長時間働く生産者や、教育を受けられず強制的に働かされている子どもたち、美しい自然や、そこにすむ動植物が犠牲になっているかもしれない。

さらに、生産という行為は、資源の過剰な消費、エネルギーの浪費、土壌をはじめとする自然環境の破壊、製品を作るときに使う有害な化学物質の排出などによって、気候変動という問題を引き起こす一因にもなっています。

私たちにとってあたりまえとなっている手ごろな価格のTシャツ。しかし、その「あたりまえ」の向こう側には驚くような現実があるのです。多くのTシャツは綿から作られています。世界では約一億世帯の農家が綿花の生産に従事しており、うち九十％は開発途上国の人たちです。一般的な農業では、農薬による被害で毎年約三十五万人が亡くなっています。綿花栽培に目を向ければ、世界中の農耕地面積のうち、綿花に使用しているわずか二・五％ほどの土地に、世界の約十六％もの殺虫剤が使用されていることから、少なくとも数の綿花農家の人々が命を落としていると考えられます。また、インドの綿花畑では、三十五万人以

上の子どもたちが劣悪な労働を強いられています。

綿花が育てられ、そこから糸が紡がれ、布が織られ、Tシャツが作られます。多くの人が携わってくれるおかげで、私たちはTシャツを買い、それを着ることができのです。

いったい、私たちはどうやってこの現状と向き合えばよいのだろうか、と不安になる人がいるかもしれません。実は私たち消費者にこそ、この現実を解決し、変化を起こす一端を担う力があるのです。

皆さんは「エシカル」という言葉を聞いたことがありますか。エシカルとは、直訳すると「倫理的な」という意味で、法律の縛りはないけれども多くの人が正しいと思うこと、または社会的規範をさす言葉です。最近、日本でも「エシカル消費」が注目され始めています。ここでいうエシカルとは、人や地球環境、社会、地域に配慮した考え方や行動のことをいいます。つまり、エシカルな消費とは、人や地球環境の犠牲の上に立っていない製品を購入することであって、いわば「顔や背景が見える消費」ともいえます。

今、世界の緊急課題である、気候変動・人権・貧困・生物多様性といった課題を同時に解決していくために、この「エシカル」という概念が有効だといわれています。

例えば、Tシャツをエシカルな観点から購入するとは、どういうことでしょうか。働く農家にも、土壌にも優しい有機栽培された綿を使って作られるオーガニックコットンのTシャツや、途上国の生産者に適正な価格を支払い、彼らの生活改善と自立を目ざすフェアトレードのTシャツ、じょうぶで長持ちする品質のよいTシャツ、リサイクルが可能な素材を使用したTシャツ、古着としても人気が出そうな飽きのこないデザインのTシャツなど、実に多様な選択肢があります。

このように、エシカル消費とは、製品の過去、現在、未来を考えて消費をすることです。過去とは、製品が作られる工程が透明性をもってわかること。現在とは、手にしている製品を長く大切に使い続けること。未来とは、製品を手放すときに、地球環境に配慮した方法かどうかまでを考えること。私たちは製品を購入する際、その未来のことも考えて一生つき合っていく必要があります。



エシカル消費につながる、さまざまな国際認証ラベル

15

10

5

エシカルという観点から、今、世界規模で社会問題となっている「プラスチックごみ」による海洋汚染^{おせん}について考えてみましょう。私たちが購入する製品には、石油由来のプラスチックでできているものが少なくありません。海辺のごみの実態^{はあく}を把握^{はあく}する市民調査である、国際海岸クリーンアップ (ICC) の結果では、七十%以上は陸域で使用される生活ごみであることがわかりました。

また、国連環境計画 (UNEP) の報告書によると、世界には年間八百万トンもの、プラスチックごみが海に流出しています。自然には分解しないプラスチック製の漁網やロープが、アザラシやウミガメに絡^{から}まるといふ被害^{ひんぱつ}が頻^{ひんぱつ}発^{はつ}しています。魚や海鳥がプラスチックごみを餌^{えさ}とまちがえて食べても消化されません。使っているときには便利なプラスチックの特徴^{とくちょう}が、ごみになったときに深刻な問題を引き起こしているのです。

二〇一八年八月にシヨッキングなできごとがありました。神奈川県鎌倉市^{かまくら}の由比ヶ浜海岸^{ゆいがはま}にシロナガスクジラの赤ちゃんが打ち上げられ、胃の中からプラスチックごみが発

見られました。母乳しか飲まないはずの赤ちゃんクジラが誤って飲み込んでしまうほど、海に多くのプラスチックごみが浮いていることが推測できる、と専門家は分析しています。

神奈川県はこのできごとを「クジラからのメッセージ」として受け止め、プラスチック製ストローやレジ袋の利用廃止、回収などの取り組みを広げていくことを宣言しました。この宣言を達成するためには、行政や企業側の努力も必要ですが、そうした取り組みを私たち消費者が支えることも重要です。プラスチックごみによる海洋汚染の問題は、私たちが消費から廃棄までの行動を真摯に考えることで、改善に導くことができるのです。

次の「問い」

あなたの身のまわりには、
どのような「ごみ」があるでしょう。

10

5



ひょうちやく 漂着したシロナガスクジラの赤ちゃんの死骸 しがい



ここで考えてきたような問題を解決するためには、見えないものを見ようとする力を育むことが大切です。身近な問題に疑問をもつところから始め、想像力をはたらかせてみる。たった一つしかない地球で、人間や他の生き物が暮らし続けられる環境を守るためにも、見えないものや他者へ思いをさせ、一人一人が自らの影響を考えながら分かち合う心をもつことが求められています。

日本人が古くからもってきた「おかげさま」「足るを知る」といった考え方を実践し、「よいあんばい」の生活をしていくことが、この地球に生きる一員として、あるべきエシカルな生き方なのです。まずは身のまわりから、自分に何ができるかを考え、実践することから始めませんか。



末吉 里花 「二九七六」

アメリカに生まれた。「一般社団法人エシカル協会代表理事」。

著書に『はじめてのエシカル』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。



文章を読んで、人間の暮らし方や、自分ができることについて、感じたことを話し合ひましょう。あなたは何かから取り組みますか。一人一人が主役なのです。

一人でできること

人と協力してできること

今日から行動できること

もっと考えてみたいこと





最後の「問い」

なぜ、人間だけがごみを出すのでしょうか。